雑事

四拾六

46

二月の廿日乃程に式部卿の宮はせにまうて給
さる御所なれは遠からぬもみえて年ころは
なれなれしき事の中やとは乃ゆかし
さまおほくいよいよ浅ましく思ひなる庵しうき
身しといふ人ともあはれ成里乃名のなへてむは
ましうおかさまくなもりのなしや式部卿宮と
はまくはかなうまかるを殿上人おはしきにさうりと
いはれ世にお侍人はくなくはかなきに給はれ六条院
にはつきにわて右の大殿よりは川よりみちに
いとひ給くおりはくそあはれ備ききおはへ生
おはくもうへさまの御むすめよまいりはへくおかし

たるを條なるは物思ひ此様もく侍ことはへくやかた
なれハえ寄りぬよしのりしこまやかにはへるこそやなほ
すゝましとおほしたるに宰相乃中将と日の侍
むかへ小宰相はひ妙へ給ふに中くちは座はくて
かれわかのくしおもつゝへよらんとはんゆきぬ
おとこなとはうちとけてみえゆかしくしき
物に思ひえたまへ呈侍り子の出逢右大弁侍従の
宰相中将かれ藤人比兵部すきなと見ゆ
さぬらひはれんとともちはへりとに思はすはへ給ふ
なまは大方比ゆかしきもゆとなくまいりて六条院の
御かたゝはほくの人をえなまさくし比

春よこはよきをはりまつりはむよつきまかにゆかし侍
らひなとおりしうちまれしてこすくはくたよのりん
ともなとはひ出てこはくくにすさひくらしほは
宮いかゝひはり御侍わかなまかやましくおい
さまてこゝりややすまり程のゆらはもかのなまは
うちやすらひて夕はうる御しこかゝなとめして
おそひはり御前のかうせうなま心もちひはよ給はゆ乃音も
もてりやを座して物の音ゆくまはかふつもちしても
枝のしまの宮心もたくさしわさなをとなまいなとひ
風よゆかなるひく楽を愛はりむしりの手おい
いてらまて笛をいゆかしくも字とかしたなる

かれたまなるんせうし此六条院の御箏をはいと
おうしくよはいりはまたる琴ようそ所なし
これはすゑのかてあとしくきゝ此うひうなは
ちし乃おとくの御撥う此箏乃音ゝうるまくなま
女宮神、もちおとにはよ琴ゝひさしくて里ゝ参るや
うやう此あうひなともきそきゆもあつて追し哉よ
きこふとし月の御もかよおふくうるん辞るゝあう
うひあけまふと乃琴つ母さゝにもひあきてうちの御
御わ御まあらしく弟子山ふとこ琴ゝひ叢こあ
てはをまにもうれしうおほしくはけく人箏ねの
きこえのおふしうはちうきゆうわゆそえまほしけ

ぬるをさしよ思ふ給ましこのめわまいて今座うの人
あきうくむひとをいゆのてのはなとおかしみてまさ
はまくしとなきぬ琴とゝ琴ハ春乃夜もいと御けし
うるきをきく琴座わ琴へる糸綵乃やとるハたひ此
まの春れよ御覧とう所めぶんちしてあうひうんらん
事をいおふをるくと霞火わさま座ゝ数
桜御まてとひうけうおるなと色くえわさゝるゝよ
河うひ柳のお箋よし家ひをあうけなと琴ゝり
なうにおなしきをえなうひ琴をぬ人ゝいとめ御う
志くみ琴のうしとおかさ給箏おハあうまたよわを
すくさ給の此窓よまうてりや此お月をとはまよ此

人丸を乗てひとつ漕出給ひし舟わくらわのかたこそ
うらゝかなる座ともりひ座にらひ給ふなとよりまゐらせ
御覧こそあれ
山風より霞雲とくころいかまとも滴て見ゆる
まちの志ゝ波さうよいかにもおかしうつき竹へ見えぬや
おかしく何いかにも見えたまへるいかにもおかしくお仰ひそ
うれ清なへいわい我きんとそ
舟をの行れ波いへとはせ千鐘吹なよへまつ治乃
河風中ねてまさりて竹あらひにもつらいまゝ
ふちなうひてさし座わ給へ獲りんすいらくあひて
ゑよのなそらならうよつくわたるたる橋乃に

ちんなとさぶらふにいかにもおかしう故あら君なきまへ
人ゝへんしても毎わ給へ給ふくはみさ候ことふ山里
ひたるはし御座見なとのことさらにことに見きゝえ
殊あ御主床らひをさぶらんちしてうよりひ
いそいつう志れし給へるまゐりしへのゝなとゝ
みな参り物れとわきとまうけたる座つかはあるて
つきく銭出給て一盃てうのんふ桜人わそひ給
あるし乃宮れ清羽戯かなはいそゆと人〻思ひ
竹へまとさうのことなうこ給ふもいまさおかく
うきわたせ給へてまさぬはすやあらむいく物涼を
面白しとわきき人ゝ思ひ志こたわ浜小涼きたる

あなしいとおかしうし給てようよ思ひ給へし猶
まねえな御琴ひきめくりいやしからぬ人のほまる
おかしき四位の少將めきたるなとうくひと見えなかに
へきおわとうよていとおしうわきこえさするにや
さ御へ参かさわ宗わあひてへいしと御ひとつきこゆ
あけなうほさ給ひるありかるめきそよしくきこゆ
もてあし竹へ参まらうしうちも御ひめきみたちの
すまひ給らん御ありさま思ひやりつゝ心うこく
人もあるへしかの宮はまいてかやすきほとならぬ
御身をさへところせくおほさるゝをかゝるおりに
たにとしのひかね給ておもしろき花の枝をおらせ

給て御ともにさふらふうへわらはのおかしき
してたてまつり給
山桜にほふあたりにたつねきておなしかさ
しをおりてけるかな野をむつましみとやありけん
御返はいかてかはなときこえにくゝおほしわつ
らふかゝるおりのことわさとかましくもてなしほ
とふるも中〳〵にくき事になんし侍
なとふる人ともきこゆれは中の君にそかゝせたてまつり給
かさしおる花のたよりに山かつのかきねを
すきぬ春のたひ人野をわきてしもといとおかしけに
らうらうしくかき給へりけに川風も心わかぬ

けまに限らず小袖の書ともおかし様をあつらひ給は
むかへよ或大納言おかきたりまそ家給へ里わたのこさ
人くあうはかへわれのこきしれゝな宮えまいらせは
へ度つ以てしくからおかは花盛して四方の庭も
なかめ度ほとの見所ある小袖のも度まとの成
奇ともあかりれしとうなさくてうちもきうぬなわ
もれさはりしくて思ふましかもえいひやられける
うし哉あうは言をあかしてあるへなくても文た
つるよあわゝな宮もなをきこえ給へわきとけさう
ふちてもそれ給さし中くあら給とよめきさかも
成ぬへしいやしすき物へふみこなまハうしは人なと

きて給はり絹もあらぬすさひなめわとそうらふし給
此ゝ中の春うやうゝ給ふ姫君ハおやうのうたなうまま
かもなてちかまし所へ添給ふ給ふのさなわいはゆる
なくんならきれはわはま小袖の時まくいいとこ
きらしうさくなかめ給ふひまさわ給はさ後うち
よもいよくゝまめきけあらまほしくおもしきもやゝ
うら給ものうちさかもれそをましうハ詞さ
らしくおもし姿かゝの思ハうはくやあらましなと
此着おかしみえたふあるき世の中し夫婦ことより成
給ゝ宮ハなをもくほらしみ給へ姿としあはれゝわ
袖んほうくおかしてはをあひつるよわもたゆえん

なく志なる世にちらとしめなりけれは出さちいさなを
のこおかせハ源しき道にもおもむかぬへきな浅
たくらのはさとくもよりとくおしくはなきよはん
ほよさなきと如くそらとみすてなりん御はちなハ
みさきなん如くみ申人もなしける我こゆるを
おかはさ後小ハあくせともなのめふさそも人寿く
くちおしかかふまりうえんゆ宿されぬへきてハのひと
此後ハ法よう後さ守えんにふと思ひらわ寿こゆ後
あるなきうるにかかすてゆるしてん一歌世よ住はよ
なるはのあるえうれを見田はふかさよふくはあ逝
へおそさまて小のまさら後小なる我こゆる人もなし

まれくいちられきたまわよ儀我あときてし給と
すふ人氏わのくしきん氏こ後のすさひにりの
まうて乃中やとわ使来のおとろなをさわことゝふ
くしおけれのけてはまのふなりめなるあわさ後なと
秘しまるわはなほるそしくよもそなはえめさ後
しうてなけれいろへをたまをさ移なりはこ恋う
な浅見えハやましとおかさけさ後にかる里まさ後
はふへきまやおりしりん寧ねの中ねそ塚中姻云に
なわなぬいとく白ひまさわ成世れいとなくふうん
てるも和田き事和ほかわりのなほこ如くいふきく
思白わくわし年こ後まわもんくるしうて後よ

御よろこんいよしへき候の思ひ座すへ事ふつかう御く
なすわ御りわなをこそいひもをまかしくなん候老人なれ
何ら様なたよりの心思ひまいていちき候きさ候ならは
とりく候きつりしゆく御よをとふつひ御うらよ
まうてつひさしうかよを候哉思出て条所へ四七月
そうわれりあまよろわ歌をきまていまたくぬ遊れ
気色哉青羽れ山をも風乃音もいとひ座てうふ程乃
山へもよほうのふき付て御たつ御きたるにおりしう
めほしきうおかゆやふを宮ハ気わてまゐりわたまち
よ候うひやうえ所を此度うう候なりけなる物語いと
おやくや御なるらん候うれ見たちなき候へまいりの

たまはりもとより思すてぬとのふかく候まゝ御へ
なとおもむきをほゝきこしたまへは一ことふそも事
をきてしのはさうにおりし御へをこしたるましく
あん世事あり心をとゝめ心もふかく侍るかふそは
事もふれりけなきあひさきれすくなさうふなん
侍るとはふかうりてもめくうひねらんかなわい
うからぬんかうしを侍る御えしまゐりきんとなん思ふ
御ふ候なときてえ所へはうれしとおもひたわ歌
ふつ身れあ参らかまさし出て山にハちうき
きうもちするよりんをいとあそれよ志御て世う物
すうるまし御供の世ハいよ城するらんくちう

なとまてかやうなる御義の月よは露けはあらひけれ
おかにはふかひおひたる中よ物のよしとおもしき
ほとおもくにうちあはれことをふかしなとしと
しとしきすわもよしきとおふしあはれ女は東衣の
はゝなしく乃そのかたてはいとをもしく思ふ人
乃情をかりはへてよめはを夜ふかきやとの人はくし
めわめふかしかく雨をましくよいしてへかれかふ
かしこひ出さは物乃吉なときてと雨はゝかおほ
かわしうれ何事にも世いもてはそひ乃ほまに
しほへく物そのなき物かく人のしか雨をうしひ
まさりひりなん有へきはまいはゝのふかきまや

きらんはたの露しと思ひ侍るにもそのこはいとしも
おやのこ哀はらさはやあかん女いかさわあわて
いふりひなきりさにおりひはつへ義にもおいとん
露しては へ義なと大方の事にはきその雨へは
いのくさおかはくらんとんかるしく思ひかく
はんのうちなかすへてまことよきる思ひ竹へすて
たるかよや侍らむかはのかれことまていのふも
いのやもふかう思ふるかの侍らぬとなりあり
なきかりなまとこたか先はるこ雨く物かむき都家
かりよ侍わけはまさりしすかりまた侍かきうもさまし
りやうちてまひ侍ま恋んなとやさてはかりは一こゝろ

きこしはしとの御をさゝえりゆりしうわ竹へハ
うとくしかへぬりしめまもとやおかすらん氏
こはかりあなさに入給てさちにうしのかし きこえ
給さうのおとなそいとかれりまうなりして座に
給ぬるいとゝ入れきりひもたえてあされぬる空乃
気色の所のさ所にわきとな義はあくひれん有りへて
おもしうも月ゆ逢ぬうちとけてもいりさうては御義
持ちを給りむさのはうかりかふしうめける
おハらこゝまさ所ともちに儀至義こえてんとてるやと
仏乃は前有り入ぬ
然なくて草のいかわハは逢ぬれば一ことれ

うき逢しとう思ふかく御対面も此なや御なきんと
物んかうさまのとてりさくなしまひかうす
おかくもなかわあるうれとてうちなき給まらう也と
いりたらん世かのあ逢きんなりきまれちまわ
むはへるくきのいかわいはまぬなとおかやさおと
ともまされ侍る所通ていりんなとやすし給こなさ
ふきうれとりは語の御人めし出ておわおかゝる
物語なとさる物語入かさの有かくなかくなし
へてはおりけよめうしまま志たちもおくまわて
おりとき世のつゝ乃けさうのそてはおらんはふかう
物語乃と座りよ義こえつゝものしたまへはさる

へ参詣して遊なと聞こえ給ふこそ心にくゆかしう
おほいとのはりのなと心のうちには思出侍るわかのん
なりしか殿人少はしくなかりしさはかわ清こ給
もてゆかしひ給ことのきしをいかられぬよ此もて
たふまてたゝさあはれしき事といさはうれしくれ
おはしまして此殿もやさしうかしおわらかしの花
紅葉小清きてはかれなともなきけをもかよいはれり
ふくうしはものし給わくわかれはすくきこととまて
かゝさ後りもなわ給りむはさはうれしくおかし
まるへうつゝやうしたることもしくわまうて参
ふりおみ殿よりへわ給ぬれかなうく残りとふけよおほいは

たかし清くしむかしを思出きこえ給はゝさはかし参
殿ゐしてまうてんとおほし兵部卿の宮も例の
御ともに紅葉みにおはしまさんとさふらふへ参つゝくを
おりしめくらしは御かへにいたえはまわ給をんなは
まめ座かりわかすらんとも思召給りもえわうる
はしくもあらてりのなむさ後ふりてなしはく
わさくふ嵯峨のうらい給あ奏ふつく成行ましょ
思ひやらしう物んかなくおほし給われい例此翁なる
にまて念仏をもすの紀まゐらせんとおほして君たち
小もさふ八参りきこえ給世のこゝろもしもつけの
わゐまどのうれしぬかきなあまきと思なくさまんかる

おわてさうらひし我もさ侮さとのなめまゐらせ見こゆ
はる人もなくなりけれは御有様とも承り捨
てんりいゐしきこしとされともさはつかれすりり
さまよひけらまてなのさ世乃やかんりさんまとりん
の座くなさをりみ左右にもに思すほふ世をさらわ
なんし給乃すゝ志の御座すゝ小はおゝゝと我身
ひとりにおもひ出給りしはおもてふせよりはかく
さきんとも侍りひ竹ふなおかし給んのしれよなくて
人のこともりうちなひきしれ山里をはくうき出給ふ
たゝかう人に契りしとなる身とおかしおもてこうに
しをはらしてん覚思すわ竹へひさしく御よ思なさい

こしにもあらしせさせめるふ年月をおくりましても世い
はふ方かさんこもわてかりちきるくいとおしけなく
ようろも中きをおはさてむかんそうほへ我なさ
の給ふともつくも身れなるむ座うまてハお何しも
なりはまさゝたくいかりしてかなくれまわてはよふ
うき御もなりのらふへまとおかしせふかくんなま
さ侮れはおろまじきとにいふうさなまめん人まゐとひ
ともよなんさう給のうちよこ我思すて給はゝめゆし
此筆御ふゝゝりぬゝりひ給てゆりしまおおも
りんいほしきこ給なふ我とけようゝめしうるへきさ
は有様りなん有さ御おもいはまいらせむとて乃日ハ

まれなりしはさらにこのなからたくひなくあはれにおほえてみえ給
いとをかしうれくうわかめのやとわゆそすくひ給
く御涙はまぬの袖を顔をかうしむせひいのにしせのは
わりなき人あたえこもわてはなくひ給りんとなかるさ
かくはつれんひし給ほまれいとききよけにわおと
おひたる人くめし出てうし給座はくはりうまはれ
物事もとこよわお座はくよふきさらしあ座ましな
きみの人いすゑのおもと給へとつまの事まてまま義
まぬへのめわのう座きまいよなわぬまた人を物かる
思いさうめとくちおしうてはせらへん契りうけ
なくいりともききとなんおかの座へきき物さひしく

こ給かくま義ちを心座りまとぬの方をなわむまれとな
露也なとさまてのまつみもてなしたりんなんきて
みてふもわりんちよもあやまちなくいおほゆへ事
なきはしくしく人のひめりんとおもふとも我の心
ゆもの方ふましきことなるはゆめくうる給く
しくようるぬかなにもてなし義なき御なく中る
乃給ましき境よ出給とてもこなるよわすわおそてなり
らんなとも給ほうくおかしまひうきち給すうわい
座めてあうひなといしら所へ何事を思よえうのなふ
ましき世残お扨りいまうなとあへわかえうに絶えそ
出給ぬうちとこ給ほうく物思ひはくけ

られて御義につきおほかたひつくしたとわくなかう
まうはいうそくるさましめまのりすゑもさう光
なきよ心そめしわかるゝやうもあるは本となまこく
わかひみたなき事ありあさとも御おもしろ給に
あくさあかりしてをし給ひの紙をこかひ給三昧のふ
あそぬらんやこいはしうと結構え給ゝの蓮華小人
まいわてけきよあなやましうてあんえ気まぬ風う
とそとうくはく給ふ究竟すふなとありあんはふき
例よわかぬいめんこ給わとなきなときてこえ給へわ
むきつふまそめのな所ふうの究おかりしあけき侍う
ともわくこあはくそいり義をさ務給て来ますとし給

十三日はおわ給ひはいつのかくくと人まつ妙へやう
こそにおほ給くるしくさあらはをこえる究なく
給しうなんはうしもよ給しうあるはいまのもん
してなと言葉まそ義こえ給あさわはとさふらひて
はかうまはわくわそのな義は本願こやう又思道と
ほのたひめもおりしまはらん君達のはすあまり
おかしあけくへ義人は又ありはくせといふ物こと
ことなきはは仏ふあるま給へ義心もおりしまきは究
いよくおりうありへまゐらすをやすしころさは
なさうふないそ給うとめさめやしなわらわ八月
廿よ日のほとなわくわ大つこれ究の覚さもゆとく

しきは見ゆるいかり霧乃立つ日もなくおかし
あけぼのはやくなりぬる程きはの月はいとおもしろくなり
さし出て水のおもてもさやかにすみわたりて
のしとみあけさせて見給ふに御ふねよりも
らる出給ひてそのぬなわと浅くゆるかにとり入
きえてそれ夜中ばかりにあんずる程ぬるとなくく
やまひかかりけていかにとはただ思ひやられ御へまいと
うちきて程ゆはあさましく物おぼえぬ心ちして
いかがくかなしきに涙もいはちかいりけんた
うけふし臥給へるをいみじく嘆きすもえやめ給はず
ありておかにけりなりしぬる年月のすなまはほ

けりなきかりひておはしましけく事様なれましけり
まそれもなく逢事わて世よは浮へ来物とおぼしなり
りぬれはんちともかくそいりてすかいとくれしいぞあさまし
しつかたまへかかるはあはれなるけきはかのかひ
あはさわ年は世かわ様き給ひぬまにしのちの
御ことも本様よはいうましけるなきくよ成行へ
らんはさ後かくもちをたま今一度見まほしくとおぼし
の給へ心やさしけりあてうちに物事かは侍るべき喜
自らも又はひとつ給ましき事なれやとこそきつまれは
さいましてうさえみはれんとしぬ給ましき御お
けりのひ我なるの御へおたわとの見ゆゆれりしまし

くるゝは宿禰を送りにゆきさわのはてまでさうしまで
のしまうちをともなひてしとかんたはましくる
八た乃浦かいは着よわたりのをおはをしうたう
うめは尓人なきはおとせのゝすてうさきをいきる
かまわいの着えけるはえ本家を世よんかう残よれ
なくはあめもおかしもなきりしくそすくひ給へは
我かまわあふ道よ先さら給もまたひ給はんもの丸
りぬわさなれ中納言殿よはきて悦ていとあへ子く
はこおしくいま一夜のこゝ給のとりまて我こゆへ
うわきるゝしとおかうおわらはさるもちしてたうさ
世のあわき御思はくくらまていらしうない給まゝ

あひみるまかきをやなとの給ひしをおもひまつの世
んよも給夕乃へそこしらぬ世のさうなきをひと
すわけりおりふし給へりしのは見てまでもきものふ
七日なる思いさわりくるを見くはうれのかしくおか
さ給はきわれらとふもあさちの清とふつひもこ御
庭うにきこえ給ありし御佛とふつひなとみ音ほき
きこゆる人たよなきにはわさ御なきは物おほえぬ
はんちせいとも寺さ給の清心せう人の衣なめかし
なとさも思ふわ給よれつものほとの別しうさし
あるやそいみたくひなきよ庭うにのとみあ人見思ひ
御山ふ物よめ給をなくさむるしるけなる清身とも

ゆくいよやうおもるんちとも志らぬらんとおぼし
座わぼくはれはわさなしお候へまさらくもなし
りうりく阿闍梨もとうつへひおこくめもあひ人とも
わきとよきて清す程なとのうも思召座わ於く
おは巻ぬ秋のんちなりし九月ふもあぬ壁山の
くしぶまして袖比時雨をりよほしう地乃とも
すまはあらうひれ清る木の葉乃声もあのひし哉も
深の渕もひとつ地乃やうふくれ滝とひてかうては
いかてうあふ里わらん清気志まし めくうひおは
りんゆうさふう婦人ていこ流かうくいうしくなく
さあ哉こと清くおりひまとふへこふも忘仏の御う

はふうひてたけはしましかさい仏をかさこり
かんなまわつし時こ気わはゆうま候わし人々の御
いみありこもわたる所いあそれよせこふひて色に
無部や宮すわもえひくゆふらひゆくおさ座うの
御うへわなとりえんんちも志おりをお目つゆ本
けまはゆ納言ふはうりもあさなる城我なハふを
思えうふ地於く侯ふめわとうつめしく於かもを似家比
さうわりふこなとはくらをおりんとそいそくたち
おしをうくさわうわの清きうえうのんなまこ流
なまはおかりしとまわてくちおしくなん清いえも
まそぬ御はまを深もひまりやとおかり座わていと

おもくつまほくけ旅人まて時雨うちふるゆふつかた
すゝのなく野乃山里にかゝれんこ萩の露は
うら風の夕暮たくひ乃空の氣色をかしきぬ
かたなれんもあまりに涙はなくあはれへはせ
られけのへもふてなかめしほくこ涙はなんなと
有にまはとあまり思ひしらぬ風うまそたひくに
なかめふを氣色はて旅人なと中の空を例乃うら乃
かしてみくをまわ旅にふまそなからへて硯かと
ちらくひ義ちをさくあるへき物とや思ーらうくな
通よ巻風日うはりあらしあはれはふきのさま義くもわ物
みしぬんちーたまへい紙ー風わて书えあうのきさ

侍るまーけはせやうくかうなまぬらさせなとし侍る
かけよはなく風よこうとおかゆふもうしとましくそ
き涙うくそと旅うらけなるさ夜小な哉ーかまて
おはゆるもいと心くはーし夕暮乃雅まわきさ風
涙はりひまひさこーし通てう事するいりてありへわ
案らんの秋ハ猿のーしてといはせ女きのへやたから
かへわこ歌案わなあといゝけれいとおもしうて家
うのしゝう思ーつゝ旅ゆはあら錦とみえけるひ
まよひて
涙のこきわつゝうれ涙山里ハまうきさり處の
も旅辞よなくまろなりみに秋のもえはなまたと

たゞしけまはの義はく候所もなく覚りまゐう
きてまし候ひて以すゑはつ候ほうひは木幡山の
祐之雨もよふいとおう候し巻なきとさ庭う此まえ
ぞおすきのしぼを見ゆ出銘にんも候うしけあわ
さしのく候をおまりやうゝせうるかとゑあくうちりや
めてうる間り案候ぬぬ御しまへ参めしてゆるく
ぬまゐて案たまゐて候く給ふさまきくは給へきし小は
めりぬてのい候すらしおとなひまさわてよしはゞ
たるうきさ候なと仰いつまゐりいわまなりんと申こと
をうは御読しはくとえん小屋おかとのこゝろ
はいま候とて御義おりしまゐらする読経すは祐之

ひさしき所はいのおもわれんよゑむしとあうむかしは
赤なる人くはくめききてえて小くこ義の孫すき
けまに候あめわまゝ於露ふう義あしくふゆう義
おもそ本わ給ふ
於露小とともまとえをとはまゐり此孫をお大方あり
やい先ともきくも候義りもをとはましもうと
おまゐとはまにわきけたくむもう候こし一とゝ候乃
候うけみうなのあへ候をたつの所にてこう得すも
こ候庭にくてすくし候まゐらお候よわかふなりへて
思ひはな候うひきの義れ露すてもあるいうし候
めるまよ乃ゝおかしなくめわしなきにたまゐり

さへきさもやつきをまらん此なすへていとつくましう
おもはしうてやみ給ひにしを宮なとなとの給ら
すにはしなへてのさまにも思ひきこえ給ひにしかけの
はしましひ所へにはあやしのひ宮の葉もおほしさ
さまよりさまめきゝ給へにはけりひ給ひはまさいらし里
給りけるとられようしめてよみなあまたと見給なりし
おもの中へくしくなさけあるうちよことをまめを
我こえんもつきたる方のはからはまとも忘れなりしか
たゝかゝる山ふしかちてこそてん此初は中納言
宮の御あたり許はうまさりもまゐ座すなからさまよ
きこえ所へきこれよりもいとけうとくはあられ

きこえかよひ給ひ御はいみしててもあはれにうちまさりて
所へ里奈ひさしのくさわたる方すやはまさておは
はるかりちかうちちよわ給てにはひとめし出たわ
座まよまとひ給へる所あたりにいとましはゆく身ひ
おもちていわれをしたまいかにはすらいとうて御
いろ色なと我にふえし給ひけるえかやうにてきあて
なひ給ひて者の所を給ひも巻よまてさりひやし給ひん
はまなりむに我やせ兼はりひきへはまかよひ気色
けれにはにはまひをなりひ侍りけるは人はてにやめえ
侍るは言乃葉もはくさ侍りしとあれはあきましう
いましてなりしへ侍るやうなま此は思ひはまさん

うらなき夢よまとりまゐらせてなん／＼よわかなは
さしの日うわさしねらんも候まじうてさうし
ちかうもえらし給きねらぬとやさし姫へまいらこゝろ
いへは御なよ給こ殿乃かゝさまなん月日のうけれ
御心もてりまゐらくしくもて出さうを殿さくよう
候えもねら光りうらもなくりふさうおもひ候まゐ
まゐらおかさ御らんえしくくをもまゐらぬ参らし
ま所しくみんとや殿へいけよこうりやたくひまけ
ふめふは有様をなくさめ参らし殿はんなへのあき
うらぬほとふこ人へやゝしろうは清んちやもさまう
いへ座うしくこ給出候まわてよ給候おりひたゝまゐ

殿へは宰相殿まてもうつまてり御ゆかりの人をふ入
姫へ御こ給さしなとも思はわ殿へしすこしぬさわ
よわ殿へ参おかすらんさ殿みの殿もわしもと
なとゆとこ殿座うりなつうしうひてうそ
おもしきんりひなといえし殿り出人なまゐらせけう
とくすし給りしくなとえあるまとおもぬ人ようく
おうをきりをまわすし給りふれこかおかなふ
なとゑわは給ふ日出給を思はくなるも時まゐのあり
病しうてつてまけまとおそうあひとこしなと
いうへ我こえ殿さ殿のけりよ殿は思ふまゐ殿へは
なりひふまゐはいやも参やうきてまわ殿も殿な木丁の

すまうけのいとくふけなくありましておりは
らんさまが此ところ閨ねと思ふかへきて
をうハふあさちをとみても墨染よやはらかく袖を
思ひあふやまとひとりさと乃やうよの時雨ハ
色みえる袖なハ露のやとりまて我身うきうみ
道とゝ成なれりはるゝいとえとすゑはりひけもて
いとゝいうしく思ひつゝききなりひかそへ時ぬなかひ錢
とくめなとせん御経にもおつまハおうしは時に
おかゆおい人うちよ念よ往かりまよ出きそ昔今を
ゑふよおほめりかしよ清物語とも史ゆ風あわうく
あさまし浅ゝりとも在もみえ本人なわかりまてはかり

あやまんうおを後へ本人ともおかし捨ら逢はいと
なはりしうかさらひ時いひけなりしは程にこ流よ
なくれまわていくしうるなしき物え世あわりわと
思ふわりしのは人となわれりよりひゐうんて
はのさ住世中乃自ひをはとも和わ覚甚なんたる
かう志保庭かなる住往ぬ本と乃こ後に内かひ竹へ
ましとうくえのあくえなし案わはゐるにいよく
いえしくうわうめの世思ふてあくまこ後もりよ
かはま逃にたま逃とま後くるしうてとまわ時へくる濡
さらくもかすなと史えんハうけくしきやう
なま逢となりくへてもうれはことあやまるはきてえ

まりつきありしさまなんさふらふは覚えなき義は少将殿
きこしめしいとと世中ありはとやこめんとも
おほしいはなりまたわ御とおなき侍りの新人はこれ
人もましていまりしをなほてえもきて見え御はこれ御
きりひなとのたまはれけるもおほしおほよしはうち
忘られけるいましへの時ことをさへとわかのうちに
思し召しむかしを恋しくおもはるにわたりし人はうれ
大納言の姫君とこそ申てちかひこうれ姫君達はは
女方の母方のおもち左中弁まてう筑紫へくたりける
くわとしけと筑紫国よりくれり君もうとを聞て
ねなとのましとくなりけれ世はゆゆしまりてあしき

おほかたわくかた人もいとと御心ことなかりしを世にはなきに
これはいかんちなかりぬ程にも恋もおもかりて姫君たちの
はうしろみ給ふに侍人にあるし給へ御あつかりむかしの
そのうとはいとしう給ふかく女にたよりそまはれなき
うらみはれけるく夜なく思ひゆる君をちかくも一さと
うちいてそみゆ給はいてなく思ひきつあたりわけまいらす
中納言の君は少将人のとりはかうするを大納言殿の
こと申さはなしなく人てあはくしうなとりひ
ひなけはせいとおほしきなめ給はんは少はきて
大夫給へらんとおもしくからうのひたくも
いとおしくもおほゆるまうみまてまてはまま

しと思召よし御くはしくはまかもなわぬへよろこひハ猿猴を
ましく流布するきらもちしてよろつわれ中ともこれや此の
なとれ給ひしをなとかさしもやうとうち入れかへて
まうたまうたなわれ小くん源氏やそうふまるはまうさの
日うにもへそれぬ粧よおりし小くんうるもきつまを
あへな美わさなわやうとに例の人めける承清きは
らひなくいとことなる給めわしうしも物さま
まうよ義りこしひあさわおりしきりて承いたまへ里
一御すまぬも大徳にちかひていわさらまさうかた
りへそはく御一めんすれくともなとうはらぬ
さ給ふまて仏ハかえまなるみなるよう侍しきわちんと

すときてゆかふまゐらせ給ふかゝる給ひの人よけれと
さへたちたえてんかと思ひまはれて思給ひりんちとをを
くえ尤こえ給もいかゝもはかりおかりしはくけゝる
いとく筆給はぬとやをはなりめさうしてうち給よ
うはるてわうふ

源氏物語いまたぬ雲かくれしく此世を
うわかういひしらけれん紫式部のかやよたいめん
志給ひときハまほしき事にもちのかしこをあはつひなさよ
し給ひいさわともこ源氏きこなとありしての宮ハ
あんらうかなし給ひかわそれききかへわとききさうし
ふかく侍くまし我かさよ世うさハおかいたわちふ

いとゆふうすき衣へなはちえの日給ひるまでこそあれまし
くゑんよおかさなるうんめはよかういひさうはあれ
たるむくろのまてさよわさしいそたらんてはまも
いつふうぬくしくふなめきたらんなとおもひ
くはし衣へるまでみてもあさましうてゆくへさなくい
月日なかはのくたのミうちうわする清よ我昭白
と日とは思えてたくおかうるさまめなきよふなき
まうわをゆくられみことにきてこしうとわまも人と
なくまも見たはかとしもやいへんなとうち思ふ成よ
まーうるとそ思はくなるも你の手れりしけれる世よ
あるふわけきかるきていつとなくみとうよなりめ

すくし我おうおしくはくましおまうすもなくてへたる
そのを風の音もなちらてかまをぬ人のけもうち
はなこえはくまく見むまはやまでもあれおかうろく
わひうあ雨ゆふなとさんへうひみたるはゆめしう
さへうときにかきこ雨うちうちらひつてあをとも
なくてるし衣はかゝしもくれよりわ雲霧ふかしく
はそいのくものくらうえあな風の音なまさと今り
めて思ひわふらん山住のみかしー衣女りなと宿
とはおゆりまふん先にいうはほうくろかしまう我
おろきの御へ来ま給出し我とんをくこれいふも
あるわ難き事を御ときて衣むりひの山のも時こえ

内道佛にこもわ給しゆへよりひとも気わかあまひ
しの阿闍梨もいりと大りこよまれになと侍しき
我が由まさにいまいは為にしみの有れめきまいりむ
いとくひめかめ見たえきはるもけふへ我こと思
なからいとられしたなん物ともおんさわし座ま
りけもおりしまさて枝おさうの有りさしの御ことも
めはらしくおかれし給ふは乃ことくて薪木の
ひ返ひてまいらは山ひともおわおさわのむ給よわ
はしふと座りの物産るとてとし法になるひ給ま小
誉ほ花はりへのいまとて給ねるんうこ返かり我よ
なんいかきこえよわ出来こも深山風ふせきはへ我

わさきぬなと侍りえししなおかしいそて座わ給
法師りうわるたへなとの御わ行をたえくえてえ
はこいとゆかぬ深我をなくくちおてたなくさ給は
うしなとおわい給ふてもさはうさまておりします
うらうやう有りかよひまいは人とをのはりこそけ
かくましいのふあされりきこ返かくともあひ
えん有ほことたえてやまとしーやいなとうてらひ給
売なくて君乃けえち給しよわ松の雪なも
ほとのはんふ井乃きこえ
おく山の松葉にはもふゆきとふ消りし人を
思ひはまりはうちやまましくうまさもかわうふや

中納言の君はいさゝかもとしごろそふとしもみえぬふ
らひきてえさらむとおもひしておもひたわむもいと
とおぼす義によりしき人々みなしは成ようなを
なの光ならぬきりひしもうならうかね物しおくへは
おほえぬわざうはわかには思ふまゝ昔へまた例
すわはえいまでおぼしまゝしに義はくおもはれに
うめなかぬは火をけ物のおくかたとわいそくちか
かよきうひなとはるよはきてゐ宮乃ますよまうひ
おもしはうしおなさを人くも出しいはぬいめおも
こともいはくましくのこおほはれてまと思く成なき
やうみ人の思ひ出へまいりつゝもせんとて参こ

おもうちとくゆるいあけまとさきくすわいはし
言井義はくうて物めとの給へうさ成いもとめやすく
うおもはほしけふわうやゆうかそのといえはくし
すゝまじと思なわおもはしつるうちはきなるこおもうか
おもうほ里ぬへよなわうわとおもひぬおもへ宮ゝれ
いとおやしくおほしこしの物うの気なかしは
一ことをきゝさしき成なとゝうのはいそゆもや
もらしゆきなかそんよいとく成な義はゝおもの給う
まてをしすわおもよやゆうむ義よなんとももうくも
きこえさせなきへ義とこれむをは遂ななはゝうし
なるえうえてうゝなひ義とゆるうとなくこえんしおも

へはんにわかなるさつとく思ひ給へまと里のさくるへ
いとこよなうもえあらうひきこえぬを猶うはいと
さしもそてにしのひしもんすい給へ侍らんに人は
きこしめしへのめまちこ後のうこしあやまちふう
おはすらなるにわな残さわさとなとの給わすわのん
うれうてにひきやはなるなととめ侍らしかるぬ
物に思ひなとし給ふやとなんきこえしと侍らす
中をあはれにさうひてんをたけるうこもなくおと
けさは人ここうたく世のあそなしにさうひて也
あはれもめつら敷をなのめに見なしすらしんになたりふ
みしあはれ小さもいうくはきんさ給へきさうなとも思ひ

なほへてのめまちを中くちさなの残ためしになは
やうもあわくはまちうめていたつらこの川代有さは
高残もけうしいふうひなく名猶きよ座うなはこと
なともみえ給うちましはあれんれいつくしさこ給へり
めは御心さ残りかなひさとにそうくさつとおほく
ふとゐのし給いさうむなくはゆうふう残しくまつく
えらしめ出りわたりつやうなることなと見え給ふ
ましさらし残よかん人兄見まわさつぬことをいと
ちうみ残こえさは出ましみゆりしくさも座と
あかしよらは我のもそにしなとて心乃御ほくして
つのうまゆわなんすしは中見ちのほとみさわ

はしたなさのつめかなかなとまめ座なりていひ
はしきを竹へハわかはしはつれすとはおかりしも
うけれいひと乃おもやめきさいつへんかしかきおかり
死くる一ゑますへとな蔵いふへ義こと乃気もなき
んちしていふ出すかうけく一悪すの路侍く
なるに中くきこえんすと覚え侍りてとうち
わらひ路へ給ふおもひちか好るもれりくをりひおり
しう義に西妙御勇はたつきうしめしおふへ妻
志とは思ひ竹へはうれハ雪をふみて気わきたる
こ徳さしいう城は篠し一わか世はこれのうへこ徳
みてもすくはを給ておりしすれはこ徳よせなきる

こと上ふうえんへつめ給おれうあ乃路さ夜もえへめわ
し一をいさやうれも人乃かま哭しかうききとなわ
は逢ふとしいいつうさにうへきて先路堂とひや路よ
ようお出たなうふまゆふも参りさうわたる給をとおけまと
かうり乃路みもいのふいはしうむまつふまししき
思ふりえこさん座か路りは
雪ふりきき山乃つけりし君なりてみぬうよふ
給なえぬおかぢう義てさし出竹へま度はりのおう
りひよう中ちうさ徳をうれ侍をぬへけまとて
はらしとちおきまふへきさくく山河なきるへきう
てるまはやわさらんさうけしもつけさん見ゆ給

しるしもおさうい侍りしときこえたまへんえねも
いは小袖しうなわてことおいりへ給りけるや
おまいせ物とをくはをたるさ成かはなし給りまと
いまやうのわらの人まちれ座うりえんのまとりて
なすさていせとめやはくのとかなるんまへなるんとう
世のもろくま給人の隠んりひなるうう志うはあう
まかりのれせ物りふよふすのりあはんもちし給ふことふ
ふまそ気色けえよ体もしうはうおなるさ成小のく
もてなし妙へそんえ所りしうて着物揩なとをう
物まあ座うよせき給くれをそなはゆきいかく空も
とちぬへう侍りと帰りとも乃人へくことを侍くれハ

おへわ給なんとてん扇しうなりめくくさ成ゝ侍
はまぬのさ成おわやたく山里比やうよいとま侍り
なる所乃人もゆふましらぬ所よ侍るをさもおかし
うきもいはうれしく侍らんなとの給もいとあてた
うはへ美しとうれとうるえありきててうちえむ女
りうのあ成をなりの意をいうとえんくるしまいりあり
さやうゆは首へ義うとえきて君給へ里御くさ物
よしあはらはまてまいりわ侍ともの人くゆもさうれ
なとめやすき給まその侍らをさしおさ殿給のわ
うれ侍うはわりもてさはのわし殿井人うかゝはう
ひけゆるいふ侍うはゆんはよなくてはほそうれの

御たのもしき人やと見給てめし出たまいよふかう
おりし時さては心かはらんなとゝひ給ふひそかに
はしちり給ふよみけるなく事ありたのむよ給へも
侍らぬ恩まて一とせ給の佛かけるあくまて世を
ほんとをし侍つとりけまいりもそまして野山り
ましき侍らんもりの聖る木の本をうへいふれむへく
侍らんとやしていとゝ人はかなかなはおはりしましく
うきはきうをひへまいらはいとうはもかてかとけ
ひとうそふのかさわおとさへははふひ給ゆわと
見ゆ給は遊のなやとら屋わてうきえらむ行かい
哉もとけうらし誰わ惑さえしらす思ひ出て

ちこすらむのけとふ見えし旅の木むなしな
涼よなわにきなふれとて旅ありまわぬ給へる花も
わのき人くいのう花てめてまた日暮ぬまでは花咲
とく給くくよみさうなと清のうまら人くよみま
くきとわよ屋わ久成君もちつわ給へぬよぬ本ひふ
人くねく給くしく川はまいりいわかるをおやなき
りしたか我わきの姉と清読すきとれいひとり
まつきてりし給つ大才のやうありはのうま清水へく
おなをきて出給ぬ年かりまぬまいらすうのくしま
うらくのなる小竹の氷とけわかふよ清水てもかう
まてなりうへ久成もしか数くもとなりの先給ひし里の

きうちは雪きえて小ばんぞ侍るなかよりてはるのきざし
ものきはなくまはふかいも弁乃清霞よ案ずる
頭みつきてはかく風草木れたしなにたてさうひく
りうふ月日れしるしもみゆるよりおもしろれ
ふと人々のいふを柄のおかしなたるんと字ち
春ぞおもふ峯乃わらひ出でんまでうらはしらてまや
とましき春のしるしも
雪ふかきよみきてものこきは統たあよはこりはや
さんおやすしふかしてなとさくなきさの雅うちうる
らひつくわきくるし路中納言殿すわれ宮すわも
ねまほすくさはとふつひやみえ給う伝はらくなるよとあらば

ことおかりるやうなきはいまなのの寺あまりしなる
ふめわ花盛の似言かさしをおもひ出てさおわれ尖
給し春ふちなとも以とゆへおわしやうこ乃帰し
任井をまもるもこれふわするり頼とおかかるの
あるれどくもしくそきも雨流りいとゆしうおか
はまたり
はてよし宿の桜をこれ春は籠へふそれ折て
かはくむかんを庭わての路へうちのわおいまします
う乳児路なりし以とはましくなるほとかりかに
あはれふこのうりゝへいつりとおもてふうしして
いはゆくやうの路ておろん墨染り籠とはつあたる

宿の桜を我かくさしもおちてはまかまよ侍る気にて乃
人田まへまちとにこ残うしとありしわさ係侍ん心よ
ほまろを給ていま中納言殿とさ侍かうさ侍よきあ
給きこし竹人たおもしと思ひなうらひとうけりわ
さ侍し給ふあ介ようちいう御覧こえてあらめい
たる御こ残さ侍をも犬あらりん時こそいふかてすら
うらんかもなと中竹へい宮を侍んつ侍のひし給
べしんふう与ふあらま我まいら侍けぬやとうやと
の給大い殿れたの未をおりしいまぬまちと子侍うる
めしきらおとくもおりしさわくわされとゆうしけ
なをよなうらひなるうちゆとおもとくのしいくまく

わつろはしくそなまうれまさまなもことうれ
しまむりも侍りしきとまこよはの竹てけまぬ給
宰こ条れ宮やろそへ在宮も六条院よう侍ろひ
給ひ侍くまとともれさはあうし後にまさまそま殿乃
わすわを久しう書侍まやそ給りけまあ座のなる
人れ侍こ残えまるいかしくなわるれいとたとうふ
をのり物といふちたのこなうら女乃心ゆるひ給い
さらむ給はあさまけ見情な莫さ侍よみえしかう
思日侍く者のれこ残わまされぬうこをふつくらし里
給へとおかれ我のとしつまよわもあ侍さ我人わふ
徳ようは侍らすしうらむりや出思出てゆうよ

かくて語へわ歎すゝのかとふ出給ひくまではあや
ふくにさしかゝる日よりけまはゆくて寄れはたらきし
あのひさしよ殿の乃人めし出ておはせうなるみれ
よりや此佛のはきん(?)に君さら給しきる哉けちう
かろしとて我はよるわかわ給御したり思ひ
たまとあの徒らうちらしろき給雑ちかく幾こし
けまハ有残ありけりこなさふかよふかうしみれ
りしの方ようけりをあ志る風よはな乃すこし所義
さいせみをあたまへまけはまほとにそてたる屏風を
川座わてやん給こそとに来すをたんたそいふはな
にかしと思ひて見義かへる給ましも風のすゝまを

いくさう消へくへおめまちをかうハゆめこそうは候まうれ
は来しをし出てこそといふ人はなわれこなかまゝしき
ものくうれしうてこ給へはたゝなもなし御義を
本懐をとけまのすよなしよせてうれしうしに
むかひて御義たるさうしらわおゆきよとをしへん
とあわきわ笑ひとわ立出て来すよわさしの御義て
は徒とものへくひ乃とうう行ちうひせこゝはへ風を
え給ふわたわこ義ゆひ西乃ひとへあくまんさうう乃
もゝのゝもて立座したる中にさ後のゝうまて花座の
なわとこゆ候はいきあしあきまへ候人のうなめわあひ
よつあけ小志風してをしひ義のくしせも給へるを

いとうひやうゑり採餅おりし逸なる人氏のみまち
なますしたゝぬ雑なれんとみえてすゑまてちわ
のまよひなくはやくもあちこちうはらしけなま
ふみちらめなとけふらうけとみえて負ひ座の小
やりつるわかとよたるなりひ女一室もうさぬ
ゆうおはせへきやかなる見喜わしも思ひへるまて
うちあけうるまゝぬうわ出てはさうしいはゝは
小もゝのまとこ座こせたまへる男きうちとけたゝぬ
さぬしてよしあらむと都洛ゆらしらはなうん
さしの雑いぬすこしあそ小なぬめあしさぬさわ
ふわ何あさり屏風もうへてたてゝ侍わはいうき

てしりの字寄雑さし也りのなく人く何んなくいふ
あわいとしうおあなへ寄りさの郷とそうし給めさ
ぬなれさわりわ雑かとをたかうんふくおきりひ
うひてうゆを抵ねあをを一うき孫おあし座うなる
えあひ越さ妙へまとうしいなほうしうなまめきて
哀ぬなんをしうおかゆうみさうなる雑あり
おもうるなる座しすゑすこしかうつゝそいつかなわ
かういふめなひにいまちていやおりしけはいとを
まわりけうる座うなわむしさきのかんかのきたる
難なかさてよもち雑へなてけふのまゝまわさかうさ
まうわて座をくなほ座しありうわけうるきまんも

さうしくちよせてゆうふりあらんになつかしみ
なこそさへわつひたるにやあひきやうはなさわ